

## 新しい男性役割の側面に関する探索的検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 渡邊 寛

筑波大学人間系 松井 豊

Exploratory research of the new male roles

Yutaka Watanabe (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

To date, male roles have generally been considered to include success and achievement at work, both physical and psychological strength and independence, emotional regulation, and not being effeminate. Recently, however, with gender equality advancing within society, men are increasingly being expected to undertake other, non-traditional, roles. This study seeks to comprehensively capture these new male roles by analyzing free descriptive responses. The result identified six clusters: reliance, being dignified, well-groomed for accompanying women, committed to the household, consideration for others, and honesty. One category (acceptance of emotional expression) did not emerge among the clusters. Moreover, the results also indicate that 18-year-old females have more egalitarian attitudes than males of the same age, and that females expect men to both take the lead of them and participate within the household. The relations between these constructs and clusters for new male roles and prior research are discussed.

**Key words:** male role, gender equality, traditional-egalitarian attitude, gender role expectation

### 問 題

性役割は、男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動や、パーソナリティに関する社会的期待・規範、およびそれらに基づく行動であると定義される(東・鈴木, 1991)。代表的な性役割観としては、「男は仕事、女は家事」が挙げられる。

男性の性役割(以下、男性役割)に関しては、鈴木(1994b)が1994年までの男性役割研究を概観し、伝統的な男性役割を、以下の4側面にまとめている。職業上の成功と達成、肉体的/精神的強さと独立心、感情表出の制限、女々しくないことである。男性役割は、女性役割と比較して、男女ともに社会的に望ましいものとされてきた(伊藤, 1978; 伊藤・秋津, 1983)。また、男性役割は高い地位と関係するため、男性役割から逸脱することは低い地位

に降りたとみなされ、社会的罰を下される(バックラッシュ; Moss-Racusin, Phelan, & Rudman, 2010)。このため、男性が従来の男性役割に沿わないことは、心理的な葛藤を生じさせることが確かめられている(Eisler & Skidmore, 1987; O'Neil, Helms, Gable, David, & Wrightsman, 1986)。日本においても、伊藤(1996)が、男性は「男らしさの鑑」に縛られていると指摘し、男性の自殺率の高さなどを論じた。

一方で、男女平等の進展とそれに伴う女性の社会進出により、性役割観に関して変化が生じている。女性の活躍推進に関する世論調査(内閣府, 2014)によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方について、1992年の調査では賛成が60.1%、反対が34.0%であったが、2014年の調査では賛成44.6%、反対49.4%となっていた。2012

年の調査では賛成が増加したものの、年々賛成が減少し、反対が増加しており、現在では約半数の者が性別役割分業をよしとしない意見を持っていた。また、労働力調査（総務省統計局、2015）によると、15歳から64歳までの女性の就業率は、2015年で過去最高の64.6%（同男性：81.8%）であり、15歳から64歳までの女性で、正規雇用の者は、1,008万人（同男性：2,212人）であった。こうした女性の社会進出に伴い、2015年の一般労働者の女性の賃金は、242.0千円で過去最高であった（厚生労働省、2015）。男性の賃金を100としたときの女性の賃金は、1989年には60.2であったが、2015年には72.2となり（厚生労働省、2015）、以前に比べて改善してきている。ただし、OECD加盟国の中で、日本は男女間の賃金格差が3番目に大きい（OECD、2015）と指摘されている。さらに、第14回出生動向基本調査（国立社会保障・人口問題研究所、2011）では、未婚女性が希望するライフコースとして、子育て後に仕事に復帰する「再就職コース」が35.2%、「両立コース」が30.6%、「専業主婦コース」が19.7%であった。以上の社会調査から、女性が家庭の中だけに留まらず、社会に出て働くことは当たり前になりつつあると考えられる。

後藤・廣岡（2003）は、性役割特性語を用いて、性役割の認知を検討した。その結果、従来男性性とみなされていた「指導力のある」や「自己主張できる」と、女性性とみなされてきた「言葉遣いの丁寧な」とが、ともに人間性として認識されるようになったことから、男女の役割が近づき、女性役割が社会的に望ましいものと捉えられるようになったと考察している。

このような性役割観の変化に伴い、男性役割に関しても変化が生じている。

社会学者の多賀ら（多賀、2011）は、サラリーマン男性への面接調査をもとに、雇用の流動化と性別分業の揺らぎなどのジェンダー関係の変容を受けて、男性性の多様なあり方が生じていると指摘した。具体的には、これまでの会社と強く結びついた画一的な男性性ではなく、子育てに積極的に関わるような男性性や、仕事を会社や家族のためではなく、個人的な自己実現のためのものとする男性性などである。一方で、「男は仕事、女は家事」から、「男は仕事、女は仕事と家事」を経て、女性たちが「男は仕事と家事、女は家事と趣味（的仕事）」という「新・専業主婦志向」をもつこと（厚生労働省、1998）を踏まえて、多賀（2006）は、女性たちの経済的に自立する自覚が不完全なことを指摘した。このような男性に対する女性の従属に関して、

Connell（1987 森・菊池・加藤・越智訳 1993）は、女性は男性の利益や欲望に自らをあわせるとして、この従属に伴う柔順さを「誇張された女らしさ」と称した。こうした指摘から、男性は女性から、家事や育児への参加を求められながらも、依然として稼ぎ手役割も求められ、男性が女性を養っているケースが多いと考えられる。

他には、田中（2015）が、現代の男性に求められる新たな能力として、常に相手の気持ちに配慮できるような「やさしさ」を挙げた。ただし、男性が女性をリードする側であることに変わりはないとして、「普段はやさしいが、いざという時は頼りになる」ことが必要であるとも指摘している。この指摘からは、女性は男性に精神的にも依存している可能性が考えられる。

心理学においては、Pleck（1976）が、男性役割には、伝統的な男性役割と現代的な男性役割があると主張した。伝統的な男性役割では、他者とのつながりは重要視されず、男女関係においては親密さがなく、女性は男性の権威に従うことを期待され、攻撃的な言動も許される。他方で、現代的な男性役割では対人的スキルが重要で、恋愛関係においてはやさしさや親密さも許容され、攻撃的ではなくクールであることが尊ばれるとされる。この指摘を踏まえて、鈴木（1994b）は、感情に基づいた人間関係を大切にし、感受性と思いやりを持つという、新たな役割も男性に期待されるようになったと指摘している。

男性の家庭参加に関しては、厚生労働省（1999）が「育児をしない男を、父とは呼ばない。」を、男性の育児参加を呼びかけるポスターのキャッチコピーにしたり、「イクメン」をもじった「イクメン」という言葉が新語・流行語に選ばれたりする（ユーキャン、2010）など、社会的にも当たり前になりつつある。

このような、男性が家事や育児などの家庭における役割を担うことに関しては、研究知見が蓄積されてきた。特に、父親の研究や、ワーク・ファミリー・コンフリクトの研究において、従来から男性が関わっている仕事役割と、従来は女性が担っていた家庭役割のバランスという側面から検討されている。例えば、共働きの家庭において、仕事か家庭かを選択しなければならない葛藤を抱えている男性は、結婚満足度や精神的健康が低いこと（加藤・金井、2006）や、仕事役割によって家庭役割に悪影響を感じている男性は、ストレス反応が高いこと（河田、2015）が明らかにされている。一方で、妻が働いている夫は、家庭に関与するほど夫婦関係満足度

や主観的幸福感が高い（伊藤・相良・池田，2006）という知見もある。

このように、男性役割の多様化は、葛藤を生じさせ、精神的健康を阻害する可能性がある一方で、心理的な適応を促進させる可能性もあり、その知見は一貫していない。いずれにせよ、これらの研究では、性別役割分業の代表例である、仕事と家庭に関する役割に焦点が当てられてきた。しかし、鈴木（1994b）が指摘するように、家庭役割以外にも感情的な結びつきや思いやりなどが、新たに男性には求められている。この新たな男性役割は、人をケアする側面と考えられ、家庭役割はその一部に過ぎない。このため、家庭役割以外の側面に関する検討も必要であると考えられる。また、これらの研究は家族内での役割を対象としていたことから、夫婦における夫や、親子における父親を対象とした調査であったが、新しい男性役割は、程度の差はあれ、既婚・未婚や世代を問わず、広く男性に求められていると考えられる。このため、新しい男性役割を検討するためには、夫や父親以外にも焦点を当てる必要がある。

家庭役割以外の新たな男性役割に関する研究としては、飯野（2013）が挙げられる。飯野（2013）は、美容関連の企業や店舗の従業員や雑誌編集者など男性7名に、男らしさとファッションや美容に関する面接調査を行った。その結果、健康やおしゃれに気を遣うことで、きれいでいたい、かっこよくありたい、よくみられたいという心理が、現在の男性にあることが推察された。また、男らしさとしてやさしさを挙げた面接協力者もいた。田中（2015）も、大学生を対象に行った「男らしさ」に関する調査を基に、眉毛を整える、タイトな服装を好むなど、現代の男性がおしゃれに気を遣うと評している。鈴木他（2014）が15歳から64歳までの男性を対象に行った、下着と男性の心理に関する研究においても、気合いや異性へのアピールの他に、男らしくなるために下着にこだわることが明らかとなっている。このように、おしゃれへの関心も、男性の新たな価値観として存在する可能性がある。

### 新しい男性役割を測定する尺度

以上のように、新たな男性役割の複数の側面が台頭していると考えられる。このような新しい男性役割を測定する尺度としては、Traditional-Liberated Content Scale (TLCS; Fiebert, 1983), Opinions About Men's Roles (OAMR; Scherrer, 1990), 脱男性役割態度スケール (SARLM; 鈴木, 1994b), Male Role Norms Inventory (MRNS; Levant et al.,

1992) の下位尺度 Nontraditional Attitude (Levant & Fischer, 1998), 現代日本における男らしさ測定尺度 (大石・北方, 2013), が挙げられる。

これらの尺度で測定されている、新しい男性役割に関する側面は、以下4つであると考えられる。第1は、「強さからの解放」に関する側面である。この側面には、従来の男性役割で必要とされた、社会的な地位の高さを求めない態度が含まれる。この点は、多賀らが指摘する、会社や稼ぎ手という役割のみに縛られない男性の新たな役割を示しており、例えば、TLCSの「仕事での成功を失うことは、男性が人生で失敗したことを表すわけではない」（以下、英語文献の尺度の邦訳は、すべて第1著者が行った）が該当する。また、肉体的な強さや感情表出の抑制に関しては否定的である。例えば、SARLMの「男性は弱音をはいたり涙を人に見せたりしてもよい」が該当する。さらに、女性的な行動や同性間での親密さに関しても寛容であり、SARLMの「同性愛の友人を持つことに抵抗はない」が該当する。これらは、すべて、伝統的な男性役割に沿った強い男性とは異なる男性の姿を表している。

第2は、「家庭への参加」に関する側面である。この側面は、従来は女性役割であった家庭役割を、男性も行うことに関する肯定的な態度を表す。具体的には、家事および育児への参加や、仕事と家庭の両立に関する項目から成る。例えば、OAMRの「夫のために妻が食事を作るなら、夫がお皿を洗うべきである」や、SARLMの「男性は家事に参加することで家族の一員としての意識が高まる」が、この側面に該当する。この側面は、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方に対して反対の意見を持つ者が多いこと（内閣府, 2014）や、「イクメン」の流行（ユーキャン, 2010）など、男性が家庭役割を行うことが求められている現状と合致する。

第3は、「思いやり」に関する側面である。この側面は、誠実な態度や、従来は機能的であった女性との関係（Pleck, 1976）においても、優しさや親密さを許容する態度から構成される。例えば、「現代日本における男らしさ測定尺度」における「公平である」、「紳士的である」や、MRNIの「男性はパートナーを愛するべきだ」などの項目が挙げられる。この側面は、鈴木（1994b）が指摘する、感情的な結びつきや思いやりといった新たな価値観を反映していると考えられる。

第4は、「おしゃれへの関心」に関する側面である。「現代日本における男らしさ測定尺度」における「見た目のよさ」因子が該当し、「スタイルがよい」

「センスがよい」「ファッションを楽しむ」などの項目から成る。飯野（2013）や田中（2015）の指摘した、おしゃれに気を遣う男性の姿を示している。

以上の知見および尺度研究をまとめると、新たに男性に求められる役割として、「強さからの解放」,「家庭への参加」,「思いやり」,「おしゃれへの関心」が考えられる。本研究では、このような、従来の研究で指摘されてきた男性役割（職業上の成功と達成, 肉体的/精神的強さと独立心, 感情表出の制限, 女々しくないこと; 鈴木, 1994b）とは異なる, 新たに男性に求められる役割から成る男性の性役割を, 「新しい男性役割」と定義する。ただし, 以上で示したような, 新しい男性役割の側面に関しては, これまで網羅的に把握した研究は行われてこなかった。そこで, 新しい男性役割の側面に関して, 網羅的に把握し, 構成概念を探ることを目的として, 大学生および専門学校生を対象にして自由記述形式による調査を行う。

## 方 法

### 調査期間

2015年6月。

### 調査対象者

東京都の4年制女子大学, 神奈川県および茨城県の4年制国立大学に通う大学生, および栃木県の専門学校に通う専門学校生で, 計449名（男性211名, 女性222名, 不明16名;  $M=19.10$ 歳,  $SD=2.25$ ）から回答を得た。

### 調査方法

調査は, 授業時間の前後に集合調査形式で行われ, 教示と配布, 回収は, 第1著者もしくは授業の担当者が行った。

質問紙では, まず, 性別と年齢を尋ねた。次に, 伝統的な男性役割に関して自由記述形式で尋ねた。ただし, 今回の分析では使用しなかった。次に, 新しい男性役割に関して自由記述形式で尋ねた。なお, 質問紙では, 分かりやすくするために, 新しい男性役割ではなく, 「新しい男らしさ」と称した<sup>1)</sup>。

1) 教示文は, 以下の通りであった。

本研究では『新しい男らしさ』に注目しています。『新しい男らしさ』とは, 「男も家事をするべきだ」, 「人に対して優しくあるべきだ」, 「男も外見に配慮するべきだ」などが男性に求められるようになっているという考え方です。以下では, こういった『新しい男らしさ』について伺います。『新しい男らしさ』として,

さらに, 新しい男性役割を求められるような場面および誰から求められているかに関しても尋ねたが, 自由記述の分類を行う際に参考にするにとどめた。最後に, 平等主義的性役割スケール短縮版 (SESRA-S; 鈴木, 1994a) への回答を求めた。SESRA-Sは, 性役割に対する態度に関して, 平等志向性または伝統志向性の程度を測定するもので, 15項目から成る。「以下の考えは, あなたの考え方にどの程度あてはまりますか」と教示し, 各項目に5件法で回答を求めた。

## 結 果

### SESRA-Sに関する分析

**尺度構成** SESRA-Sに関して, 各項目の回答を合計して項目数で割った平均点を算出し, SESRA-S得点とした ( $M=3.57$ ,  $SD=0.56$ )。得点が高いほど, 平等的な性役割態度を有することを表す。本研究のサンプルにおけるクロンバックの $\alpha$ 係数は.85であった。

### 新しい男性役割の構造に関する分析

**新しい男性役割に関する自由記述の分類** 心理学を専攻する大学院生2名が, 内容の類似性に基づいて自由記述回答を分類し, 心理学を専門とする教員が分類内容を確認した (Table 1)。その結果, 「料理ができる」(35件), 「家事を行う」(86件), 「育児を行う」(116件), 「レディ・ファースト」(15件), 「女性に優しくする」(20件), 「女性への気遣い」(25件), 「平等志向」(17件), 「肉体的な男らしさ」(14件), 「身だしなみを整える」(35件), 「コミュニケーション力が高い」(15件), 「権威的でない」(19件), 「リーダー的志向」(20件), 「賢さ」(13件), 「意思を曲げない強さ」(11件), 「やさしさ」(43件), 「助ける・協力する」(13件), 「誠実さ」(27件), 「気を配る」(34件), 「感情表出の許容」(4件)の19カテ

あなたが思いつくものをできるだけ多く挙げてください。また, それらはどのような場面が必要だと思いますか。あるいはだれから求められると思いますか。例に従って, 以下の空欄にあなたの思いつくものを自由にお書きください。思いつかない場合は「思いつかない」, 覚えていない場合は「覚えていない」とお書きください。なお, 社会で一般的に思うことでも, 個人的な体験やご意見でも構いません。

(例) 新しい男らしさ: 男は他人に配慮すべきだ

状況・場面: サークルでの話し合い

誰から: 友人

なお, 実際にはこれらの例を横に並べ, その下に回答欄を7行設けた。

ゴリーを生成した。これらのカテゴリーに含まれなかった回答は「その他」(23件)としたが、以降の分析には含めなかった。

新しい男性役割の構造 上記19カテゴリーについて

て、各カテゴリーに属する記述がある場合は2、記述がない場合は1として数値化した。その後、数量化理論Ⅲ類（以下、数量化Ⅲ類）を行い、1・2軸のカテゴリースコアを算出した。固有値は順

Table 1  
新しい男性役割カテゴリー記述例

クラスター	カテゴリー	記述例	件数	
			カテゴリー	クラスター
頼りになる	賢さ	能力が高い 頭がよくあるべき	13	24
	意思を曲げない強さ	文句を言わない しっかりと意思を持つべきだ	11	
堂々としている	肉体的な男らしさ	運動能力がある 鍛えるべきだ	14	34
	リーダー的志向	堂々とするべきだ 場をまとめる役割がある	20	
家庭への参加	料理ができる	料理ができる	35	237
	家事を行う	家事を行う	62	
	育児を行う	育児を行う イクメンになるべき	92	
	家事を行う・育児を行う両方に該当 <sup>a)</sup>	家庭への積極的な関わり 家事も育児もするべきだ	48	
女性を エスコートする かつこよさ	レディ・ファースト	レディ・ファースト	15	75
	女性への気遣い	男性がデートの計画を立てる 女性を気遣う	25	
	身だしなみを整える	おしゃれを楽しむ 外見・身なりを気にする	35	
他者への配慮	コミュニケーション力が高い	聞き上手になるべき 面白い	15	131
	気を配る	気遣いができる 気が利く	34	
	やさしさ	優しい 寛大である	43	
	権威的でない	女性を頼る 威張ってはいけない	19	
	女性に優しくする	女性に優しくするべき	20	
	平等志向	女性を差別しない 男女平等であるべきだ	17	
誠実さ	誠実さ	デリカシーがある 誠実さ	27	57
	助ける・協力する	協力的である 困っている人を助ける	13	
	感情表出の許容	泣いてもよい 涙を見せてもよい	4	
	その他		23	23
計			585	

<sup>a)</sup> 家事を行う・育児を行う両方に該当する記述(24件)は、件数を2倍(48件)に換算した。

に .082, .071, .067 であった。算出された2軸までのカテゴリースコアを用いてクラスター分析(ウォード法)を行い、6つのクラスターを抽出した。カテゴリースコアのプロット図とクラスターを Figure 1 に示す。

第1に、「賢さ」、「意思を曲げない強さ」でまとまるクラスターで、『頼りになる』と名付けた。第2に、「肉体的な男らしさ」、「リーダー的志向」でまとまるクラスターで、『堂々としている』と名付けた。第3に、「レディ・ファースト」、「女性への気遣い」、「身だしなみを整える」でまとまるクラスターで、『女性をエスコートするかっこよさ』と名付けた。以上3クラスターは第1象限にまとまった。第4に、「料理ができる」、「家事を行う」、「育児を行う」でまとまるクラスターで、『家庭への参加』と名付けた。『家庭への参加』クラスターは第2象限にまとまった。第5に、「コミュニケーション力が高い」、「気を配る」、「やさしさ」、「権威的でない」、「女性に優しくする」でまとまるクラスターで、『他者への配慮』と名付けた。『他者への配慮』クラスターは第1・4象限にまとまった。第6に、「平等志向」、「誠実さ」、「助ける・協力する」でまとまるクラスターで、『誠実さ』と名付けた。『誠実さ』クラスターは第4象限にまとまった。なお、唯一第3象限に布置した「感情表出の許容」は、クラスターとしてまとまらなかった。

### 新しい男性役割1軸・2軸のサンプルスコアに関する分析

**相関分析** 新しい男性役割と平等主義的性役割態度との関連を検討するため、数量化Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアと SESRA-S 得点の相関係数を求めた (Table 2)。その結果、1軸および2軸共に有意な結果は得られなかった。男女別に算出した、サンプルスコアと SESRA-S 得点の相関係数も、1軸および2軸共に有意ではなかった。

**性別と年齢による2要因分散分析** 続いて、数量化Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアを従属変数として、性別と年齢の2要因分散分析を行った (Table 3 および Table 4)。その結果、1軸では交互作用が5%水準で有意であった。交互作用について、18歳において1%水準で性別の単純主効果が有意であり、18歳男性が正の方向、18歳女性が負の方

Table 2  
新しい男性役割1・2軸のサンプルスコアと  
SESRA-S 得点の相関係数

	相関係数	
	1軸	2軸
全体	-.01	-.06
男性	.09	-.02
女性	-.08	-.08

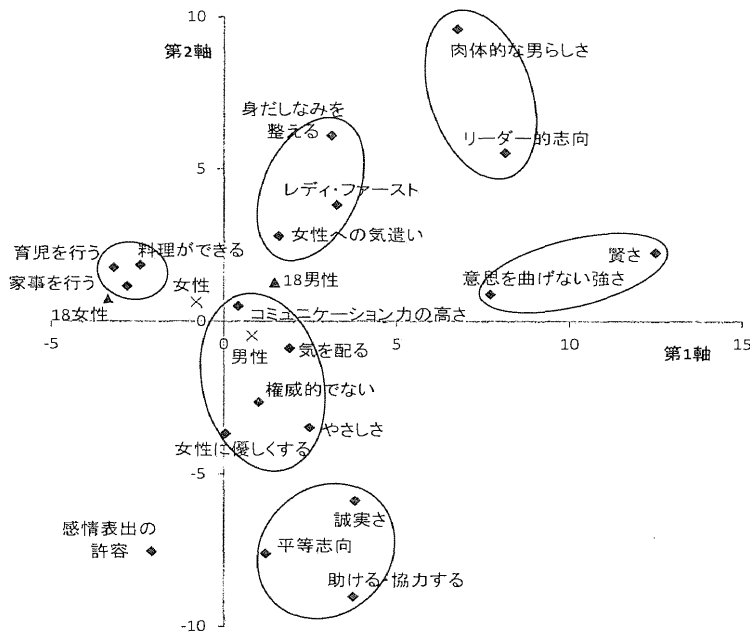


Figure 1. 新しい男性役割カテゴリースコアのプロット図。  
注) 囲み線はクラスターを表す。

向であった。19歳、20歳以上においては、性別に有意差はみられなかった。

2軸では性別の主効果が5%水準で有意であったが、交互作用は有意ではなかった。性別の主効果については、男性が負の方向、女性が正の方向であった。なお、1軸で有意差の見られた18歳男性と18歳女性と、2軸で有意差の見られた男性と女性に関しては、見やすさのために平均値を10倍して Figure 1 にプロットした。

**男女別の各クラスターに属する記述の有無** 2軸で性別の主効果が有意であったため、追加分析として、クラスターごとに $\chi^2$ 検定を行い、男女で各クラスターに属する記述の有無の割合が異なるかどうかを検討した (Table 5)。その結果、「女性をエスコートするかっこよさ」が5%水準で、「家庭への参加」が1%水準で、それぞれ有意であった。どちらのクラスターも、男性よりも女性の方が記述した割合が有意に多かった。

## 考 察

本研究では、新たに男性に求められている男性役割に関して、網羅的に把握し、構成概念を探ることを目的として、自由記述形式による調査を行った。以下では、生成された6つのクラスターに関して、先行研究から導出された4側面との対応関係を説明する。その上で、本研究の意義と課題を述べる。

先行研究の知見をまとめると、新しい男性役割の側面は、「強さからの解放」、「家庭への参加」、「思いやり」、「おしゃれへの関心」が考えられた。他方で、本研究では、参加者から得られた自由記述を基に、新しい男性役割の構造に関して、数量化Ⅲ類とクラスター分析により検討した結果、以下のクラスターを生成した。

第1に、賢く、はっきりとした意思を持つような「頼りになる」ことである。第2に、男らしい体つきで、周りの人を引っ張っていきような「堂々としている」ことである。これら2つのクラスターは、鈴木(1994b)が指摘した、「肉体的/精神的強さと

Table 3  
新しい男性役割1・2軸のサンプルスコアに関する2要因分散分析の平均と標準偏差

性別	年齢3群	1 軸			2 軸		
		<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
男性	18歳	115	0.15	1.16	115	0.13	0.95
	19歳	67	-0.06	0.62	67	-0.24	0.87
	20歳以上	28	0.16	1.24	28	-0.30	1.21
女性	18歳	74	-0.34	0.66	74	0.07	0.67
	19歳	89	0.05	1.09	89	0.00	1.05
	20歳以上	59	0.05	1.12	59	0.14	1.18

Table 4  
新しい男性役割1・2軸のサンプルスコアに関する2要因分散分析

	因子	<i>SS</i>	<i>df</i>	<i>MS</i>	<i>F</i> 値	多重比較	$\eta_p^2$
1 軸	性別	2.31	1	2.31	2.29		.01
	年齢3群	2.21	2	1.11	1.10		.01
	性別 * 年齢3群	7.38	2	3.69	3.66 *	18男性>18女性**	.02
	誤差	429.66	426	1.01			
	全体	441.81	431				
2 軸	性別	3.97	1	3.97	4.19 *	女性>男性	.01
	年齢3群	4.38	2	2.19	2.31		.01
	性別 * 年齢3群	3.86	2	1.93	2.04		.01
	誤差	403.72	426	.95			
	全体	413.58	431				

注) \* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ 。交互作用の多重比較は Bonferroni 法による。

独立心」に該当し、伝統的な男性役割の側面であると考えられる。

第3に、身だしなみを整え、女性への気遣いをするような「女性をエスコートするかつこよさ」である。このクラスターは、先行研究から導出されていた「思いやり」と「おしゃれへの関心」に該当する。ただし、女性をリードするという点では、伝統的な男性役割に近いとも考えられる。

第4に、家事や育児に積極的に関わるような「家庭への参加」である。このクラスターは、先行研究から導出されていた「家庭への参加」に該当する。

第5に、コミュニケーションをよくとり、優しく人に接し、威張らないような「他者への配慮」である。第6に、誰にも平等に接し、他者と協同するような「誠実さ」である。これら2つのクラスターは、先行研究から導出されていた「思いやり」に該当する。

「感情表出の許容」カテゴリに関しては、クラスターとしてまとまらなかったが、先行研究から導出されていた「強さからの解放」に該当する。

以下では、伝統的な男性役割であると考えられる、「頼りになる」と「堂々としている」以外のクラスターに関して、先行研究と比較する。

「思いやり」の側面と考えられるクラスターは、「女性をエスコートするかつこよさ」、「他者への配慮」、「誠実さ」の3つであった。これらは、鈴木(1994b)が指摘する、「感情に基づいた人間関係を大切にし、感受性と思いやりを持つ」という新たな男性の役割を反映していると解釈される。先行研究の整理では、「思いやり」という広義の側面として捉えられたが、その内容がさらに3側面に分かれていると推察される。これら3側面に関して、思いやる対象に焦点を当てると、「他者への配慮」と「誠実さ」は、一般他者に対する「思いやり」であり、「女性をエスコートするかつこよさ」は、女性に対する

「思いやり」であると考えられる。この捉え方をすれば、「思いやり」は対一般と対女性という2つの方向性を有すると解釈される。

対一般となる、「他者への配慮」と「誠実さ」は、従来の女性的な特性である共同性とも考えられ、自分を取り巻く人間関係の維持に貢献するような「共同性の高さ」が、男性にも求められていると考えられる。一方、「女性をエスコートするかつこよさ」に関しては、伝統的な男性役割である女性のリードという側面に、「思いやり」が加わった形のクラスターであると解釈される。この点は、田中(2015)が指摘する、「普段はやさしいが、いざという時は頼りになる」男性像を表していると考えられる。また、「身だしなみを整える」カテゴリが「女性をエスコートするかつこよさ」に含まれ、「おしゃれへの関心」という側面は、独立したクラスターとして抽出されなかった。衣服は異性へのアピールを喚起することを意図して選択される(鈴木他, 2014)ことを踏まえると、「身だしなみを整える」ことが、異性を惹き付けるために行われる、異性に配慮した行動であるため、女性への気遣いと同一のクラスターを形成したと考えられる。

「家庭への参加」の側面は、本研究においても「家庭への参加」クラスターとして生成された。この側面は、TLCS (Fiebert, 1983) や OAMR (Scherrer, 1990), SARLM (鈴木, 1994b) においても抽出されている。また、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別による役割分担に関しては、否定的な意見が半数を占めていることが明らかになっている(内閣府, 2014)。こうした知見を踏まえれば、女性のみが家庭役割を担うのではなく、男性も積極的に家庭役割を担う姿勢が求められていると考えられる。

なお、弱音を吐く、涙を見せるといった「感情表出の許容」に関しては、件数が少なく、クラスター

Table 5  
男女別の各クラスターに属する記述の有無

クラスター	n	記述なし		記述あり		検定
		男性	女性	男性	女性	
頼りになる	433	46.0%	49.2%	2.8%	2.1%	$\chi^2(1)=0.63$ , <i>n.s.</i>
堂々としている	433	44.8%	48.5%	3.9%	2.8%	$\chi^2(1)=1.22$ , <i>n.s.</i>
女性をエスコートする かつこよさ	433	43.4%	42.0%	5.3%	9.2%	$\chi^2(1)=4.41$ , $p<.05$
家庭への参加	433	32.1%	27.5%	16.6%	23.8%	$\chi^2(1)=6.77$ , $p<.01$
他者への配慮	433	36.7%	37.9%	12.0%	13.4%	$\chi^2(1)=0.13$ , <i>n.s.</i>
誠実さ	433	43.4%	45.5%	5.3%	5.8%	$\chi^2(1)=0.01$ , <i>n.s.</i>



としてまとまらなかった。先行研究を併せた見解では、社会的な地位を必要としないことや、感情を押し殺す必要はないという「強さからの解放」が、新しい男性役割の側面として存在すると考えられた。しかし、そのようなクラスターは抽出されなかった。この結果に関しては、大学生を対象とした調査であるためと考えられる。大学生は、男女が同じように活躍するような環境や、男女平等を謳う教育によって、平等的な意識をもつために、そもそも男性が強さを求められたり、強さに押しつぶされたりする場面が少ないと考えられる。一方で、新しい男性役割の調査項目において、伝統的な男性役割である「頼りになる」と「堂々としている」が抽出されたことから、「強さからの解放」の側面が男性にあまり認められていないとも考えられる。男性が弱さを露呈することは女々しいことであり、女々しい言動は、伝統的な男性役割である「女々しくないこと」（鈴木，1994b）に反する行為であるため、依然として忌避されている。このため、男性は、「強くなければならない」という伝統的な男性役割の鎧（伊藤，1996）に縛られている可能性が推察される。

SESRA-S 得点と新しい男性役割 1・2 軸のサンプルスコアとの相関係数に関しては、有意な結果は得られず、6つの側面間で、性役割に対する伝統志向性や平等志向性には、差がなかった。他方で、SESRA-S が、本研究で明らかにした男性役割の側面とは異なる性質の現象を測定している可能性がある。SESRA-S は、女性の働き方や家事・育児の取り組み方、旧姓の使用に関しての項目から成り、主に女性の性役割への態度を測定していると考えられる。一方で、本研究では男性の性役割に関する6つの側面が明らかになった。これらの側面は、SESRA-S では測定されていない概念であるため、SESRA-S 得点との関連がみられなかったと考えられる。

性別と年齢の2要因分散分析では、1軸上で18歳男性が正の方向、18歳女性が負の方向に、それぞれ布置された。1軸は、正の方向にいくほど伝統的なクラスターが、原点近くから負の方向にかけては平等的なクラスターが、それぞれ布置していた。この布置から、18歳男性は伝統的な考えを有し、18歳女性は平等的な考えを有していることが示唆される。女性の方が平等意識の高まりが早く、大学初期にはこれまで育ってきた環境やそこで育まれた態度が影響しやすいため、大学に入学したばかりの18歳では、男性よりも女性の方が平等的なクラスターに近く布置されたと考えられる。

2軸上では、男性が負の方向、女性が正の方向に、

それぞれ布置された。中でも、「女性をエスコートするかつこよさ」と「家庭への参加」に関して、男性よりも女性が多く記述していた。これらの結果は、女性は、おしゃれな身なりをして女性をリードしてくれることと、女性が担ってきた家庭役割に参加することが、共に男性に求められていると認識していることを表している。従って、男性が女性に対して男らしく振る舞うためには、多重役割を担うことが必要になると示唆される。

女性は男性よりも平等的な考え方を持っていたことに加え、女性の就業率が上昇していること（総務省統計局，2015）や、未婚女性の理想のライフコースとして「再就職型」や「両立型」が多かったこと（国立社会保障・人口問題研究所，2011）から、現代の女性は自らが働くことに対して肯定的であると推察される。一方で、従来の性役割に基づき、家庭役割を女性に求める風潮は未だ根強い（ため、働く女性は仕事役割と家庭役割を共に担う、多重役割の状態になりやすい。本研究において、女性が男性に対して多重役割を求めている背景には、女性自身が多重役割を担っていることが関連していると考えられる。この関連については、2つの解釈が可能であろう。第1に、一定の未婚女性が「両立型」のライフコースを受け入れていることを踏まえれば、女性たちは多重役割をこなしていこうと努力している。故に、男性に対しても、仕事だけでなく家庭に関与することを当たり前と考え、家族において男女がともに仕事にも家庭にも責任を持つ状態を好ましく思っている可能性がある。第2に、女性は自分が望むように生きたいと思い、自分たちの多重役割の責任を肩代わりしてくれる男性を望ましく思っている可能性がある。こうした考え方から、「家庭への参加」の女性の記述が多かったと考えられる。

また、女性は「新・専業主婦志向」を持つこと（厚生労働省，1998）や、女性は男性に対してやさしさを求める反面、女性をリードしてくれることも求めていること（田中，2015）が指摘されてきた。さらに、女性の経済的地位は依然として低い（OECD，2015）ため、女性が男性に依存しやすい立場にいることが推察される。こうした理由から、女性は、やさしさと（かつこよい）リードを併せた女性への気遣いが、男性に求められる役割であると認識し、「女性をエスコートするかつこよさ」においても、女性の記述が多かったと考えられる。

これらの結果と先行研究の知見を併せると、新しい男性役割は、「強さからの解放」、「家庭への参加」、「女性をエスコートするかつこよさ」、「他者への配慮」、「誠実さ」から構成されていると考えられた。

本研究によって、新しい男性役割の側面を網羅的に把握できたことに加えて、伝統的な男性役割の根強さも同時に示唆されたことは、日本における今後の男性役割研究にとって重要な意味を持つと考えられる。加えて、女性は男性に対して、複数の役割を期待していることが示唆された。こうした男性に対する多重役割の期待は、男性の精神的健康を阻害する可能性がある（加藤・金井, 2006; 河田, 2015）一方で、心理的な適応が促される可能性もある（伊藤・相良・池田, 2006）。今後は、男性役割の側面のみならず、男性役割に伴う男性の心理に関するさらなる知見の蓄積が望まれる。

最後に、本研究の課題として、以下3点が挙げられる。

第1に、一般化可能性である。本研究では、大学生および専門学校生を対象に調査を行ったが、他の年代が捉える男性役割は異なる可能性があるため、新しい男性役割の側面が、他の年代にも共通しているかに関して検討する必要がある。第2に、新しい男性役割が生じた背景を探ることである。本研究では、新しい男性役割のいくつかの側面が抽出されたが、新しい男性役割がなぜ求められるようになったのかに関しては、あまり検討されていない。このため、新しい男性役割が求められる心理的背景を探る必要がある。第3に、伝統的な男性役割との関係性である。本研究では、伝統的な男性役割に関する側面も抽出され、現代の男性にも求められている可能性が考えられた。このため、伝統的な男性役割と新しい男性役割がどのような関係を帯びているのかを検討する必要がある。

## 引用文献

- 東 清和・鈴木淳子 (1991). 性役割態度研究の展望. *心理学研究*, 62, 270-276.
- Connell, R. W. (1987). *Gender and power: Society, the person and sexual politics*. Cambridge: Polity Press. (コンネル, R. W. 森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞 (訳) (1993). ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学 三交社)
- Eisler, R. M., & Skidmore, J. R. (1987). Masculine gender role stress: Scale development and component factors in the appraisal of stressful situations. *Behavior Modification*, 11, 123-136.
- Fiebert, M. S. (1983). Measuring traditional and liberated males' attitude. *Perceptual and Motor Skills*, 56, 83-86.
- 後藤淳子・廣岡秀一 (2003). 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化. *三重大学教育学部研究紀要*, 54, 145-158.
- 飯野智子 (2013). 「男らしさ」とファッション美容実践女子短期大学紀要, 34, 83-99.
- 伊藤公雄 (1996). 男性学入門 作品社
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の認知に関する研究. *教育心理学研究*, 26, 1-11.
- 伊藤裕子・秋津慶子 (1983). 青年期における性役割観および性役割期待の認知. *教育心理学研究*, 31, 146-151.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006). 多重役割に従事する子育て期夫婦の関係満足度と心理的健康—妻の就業形態による比較—. *聖徳大学研究紀要 人文学部*, 17, 33-40.
- 加藤容子・金井篤子 (2006). 共働き家庭における仕事家庭両立葛藤への対処行動の効果. *心理学研究*, 76, 511-518.
- 河田 英 (2015). 乳幼児をもつ夫婦における父親のストレス—仕事と家庭の多重役割, 職場の環境, 性役割観の観点から—. *日本女子大学大学院人間社会研究科紀要*, 21, 69-84.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2011). 第14回出生動向調査. Retrieved from [http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14\\_s/point14\\_s.pdf](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/point14_s.pdf) (2016年3月9日)
- 厚生労働省 (1998). 厚生白書 (平成10年版). Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/toukei-hakusho/hakusho/kousei/1998/dl/03.pdf> (2016年2月11日)
- 厚生労働省 (1999). 雇用均等・児童家庭局. Retrieved from [http://www1.mhlw.go.jp/topics/profile\\_1/koyou.html](http://www1.mhlw.go.jp/topics/profile_1/koyou.html) (2016年2月11日)
- 厚生労働省 (2015). 平成27年賃金構造基本統計調査. Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2015/dl/01.pdf> (2016年3月9日)
- Levant, R. F., & Fischer, J. (1998). The male role norms inventory. In C. M. Davis, W. H. Yarber, R. Bauserman, G. Schreer, & S. L. Davis (Eds.), *Sexuality-related measures: A compendium* (2nd ed., pp. 469-472). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Levant, R. F., Hirsch, L. S., Celentano, E., Cozza, T. M., Hill, S., MacEachern, M., ... Schnedeker, J. (1992). The male role: An investigation of contemporary norms. *Journal of mental health counseling*, 14, 325-337.
- Moss-Racusin, C. A., Phelan, J. E., & Rudman, L. A. (2010). When men break the gender rules:

- Status incongruity and backlash against modest men. *Psychology of Men and Masculinity*, 11, 140-151.
- 内閣府 (2014). 女性の活躍推進に関する世論調査 Retrieved from <http://survey.gov-online.go.jp/h26/h26-joseikatsuyaku/gairyaku.pdf> (2016年3月9日)
- 大石さおり・北方晴子 (2013). 現代日本社会における男らしさ測定尺度の作成 文化学園紀要, 服装学造形学研究, 44, 63-73.
- Organisation for Economic Co-Operation and Development (2015). Japan policy brief. OECD Better Politics Series.
- O'Neil, J. M., Helms, B. J., Gable, R. K., David, L., & Wrightsman, L. S. (1986). Gender-role conflict scale: College men's fear of femininity. *Sex Roles*, 14, 335-350.
- Pleck, J. H. (1976). The male sex role: Definitions, problems, and sources of change. *Journal of Social Issues*, 32, 155-164.
- Scherrer, A. R. (1990). Attitude toward the non-traditional male role. Honors Theses, Paper309, 1-19.
- 総務省統計局 (2015). 労働力調査 Retrieved from <http://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/pdf/youyaku.pdf> (2016年3月9日)
- 鈴木淳子 (1994a). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 鈴木淳子 (1994b). 脱男性役割態度スケール (SARLM) の作成 心理学研究, 64, 451-459.
- 鈴木公啓・菅原健介・西池紀子・小松原圭司・西口天志・藤本真穂 (2014). 男性における下着の消費行動—「こだわり」についての心理的要因の検討— 繊維製品消費科学, 55, 25-34.
- 多賀 太 (2006). 男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース— 世界思想社
- 多賀 太 (編著) (2011). 揺らぐサラリーマン生活—仕事と家庭のはざままで— ミネルヴァ書房
- 田中俊之 (2015). 男がつらいよ 希望の時代の希望の男性学 KADOKAWA
- ユーキャン (2010). 「現代用語の基礎知識」選 ユーキャン新語流行語大賞 全授賞記録 Retrieved from <http://singo.jiyu.co.jp/> (2016年2月11日)  
(受稿3月31日：受理4月26日)